

## 初世梅若実と横浜の素人弟子： 横浜養心会をめぐって（その一）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-05-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三浦, 裕子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/810">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/810</a>

# 初世梅若実と横浜の素人弟子

— 横浜養心会をめぐって (その一) —

三浦裕子

## はじめに

シテ方観世流能役者・初世梅若実（一八二八—一九〇九）は嘉永二年（一八四九）から明治四一年（一九〇八）までの六〇年間、ほぼ毎日、日記を書いていた。この日記は『梅若実日記』（以下、『日記』と略称する）として翻刻本が出版され、幕末から近代にかけての能楽史の解明を促進させる端緒となった。

初世梅若実は、自家の記録を残す意識で『日記』を綴ったものと思われる。記事のなかには、梅若家の役者が出演した能に関する記録があり、日時・主催者・会場・上演曲・三役の配役・出勤料などを細かく記してい

る場合もある。これは梅若家中の出来事を記すものであると同時に、当時の能楽界全体の動向を示す、その価値も有する資料であることが言える。また、『日記』には初世梅若実らが素人弟子に稽古を行った記録が散見される。誰がどこに稽古に行ったか、誰が稽古を受けたか、といったメモ書き程度のものも多く、前述の演能記録のような詳細な内容が記載されていないことがほとんどである。それでも梅若家が素人弟子に行った稽古の様子がある程度わかる。何よりも、梅若家の素人弟子に対する稽古の記述には相当な分量があり、同家の素人弟子を教える熱意には並々ならぬものがあつたことが伝わってくる。これは、新たな素人弟子の開拓を通じて梅若家が発

展していく、その足跡を辿る意味を持つものとして、近代能楽史上、注目すべき記録と言えよう。

本稿は「横浜養心会」という素人弟子の団体を軸に、梅若家と素人弟子の関係を探ることを目的とするものである。横浜養心会を調査の対象に選んだ理由には三つある。第一に、梅若家がこの団体に頻繁に出稽古する様子が『日記』から確認できるからである。第二に、明治二三年、横浜養心会が中心となって横浜の伊勢山皇大神宮に能舞台を建設しており、非常に行動的な団体であったことである。第三に、初世梅若実自家に入門した素人弟子の記録を『門入性名年月扣』という資料に残しているが、それによれば幕末から明治四〇年に至る半世紀の間に九六四人が入門するなか、横浜住などと思われる者が一五六人に上り、梅若家の素人弟子のうち一六パーセントが横浜の関係者であった計算になる<sup>3)</sup>。

ちなみに、横浜養心会は明治一八年二月から『日記』に確認できるもので、この頃からこの名称を用いるようになったと思われる。しかし、この団体の原形とも言うべき組織が明治一五年一月に認められるので、本稿で

は、この時期からの活動を追っていくこととする。

伊勢山皇大神宮の能舞台や梅若家の素人弟子について論じたごく初期の資料に『横浜社会辞彙』（横浜通信社、一九一七年<sup>4)</sup>）の項目「伊勢山能楽堂」などがある。それを参照しつつ、本稿では前掲の『日記』を含めた初世梅若実関係の記録類四点を主要な資料として用いることにした。以下に『日記』以外の概要を紹介する。

#### (一) 『門入性名年月扣』（略称『門入扣』）

弘化二年（一八四五）から明治四〇年まで、梅若家に入門した九六四人の素人弟子の入門年月日を記すもの。初代梅若実資料研究会による翻刻・解説・索引に「梅若六郎家蔵『門入性名入門扣』翻刻及び人名解説（一）〜（五）」（同）人名索引・補遺」（『武蔵野大学能楽資料センター紀要』一五号〜二〇号「二〇〇四年〜二〇〇八年」）がある。この翻刻・解説では入門者に【001】などと通し番号を付した。本稿では、この番号を持つ人物を初めて記述する際、それを記すようにした。

## (二)『伝授免状』全二冊(略称『伝授扣』)

明治一一年から四〇年まで、梅若家が素人弟子に行った伝授の記録。初代梅若実資料研究会による翻刻・索引に「梅若六郎家蔵『伝授免状扣』(全)翻刻」(同)人名・曲名・その他の索引(科研費・研究成果報告書『近代における能楽の伝授と受容の諸相―免状に見る梅若家と素人弟子』二〇一七年)がある。

## (三)『芸事上数々其他秘書当座扣并略見出シノ事』

(略称『当座扣』)

明治四〇年頃に初世梅若実が綴った回想録。初代梅若実資料研究会による翻刻・索引などに「『芸事上数々其他秘書当座扣并略見出シノ事』翻刻(一)」「(三)」「(同) 解題および見出し索引、人名・曲名等索引」『武蔵野大学能楽資料センター紀要』二二号、二五号「二〇一一年～二〇一四年」がある。

なお、本研究は以下の構想を持って書き進めているが、紙幅の関係もあり、今回は第一章までを発表し、第

二章以降は次年度の紀要にまとめることとする。

はじめに

第一章 明治一五年における横浜への出稽古

第二章 明治一六年以降の横浜への出稽古

まとめ

## 第一章 明治一五年における横浜への出稽古

(一) 出稽古を始めた時期をめぐって

『日記』において梅若家が横浜の素人弟子のところに  
出稽古に行った記事を最初に確認できるのは、明治一五  
年一月一七日に初世梅若実が茂木惣兵衛【283】宅に向  
いたものである。明治九年に東京で初めての天覧能が岩  
倉具視邸で催され、一一年に英照皇太后の御所である青  
山大宮御所に能舞台が建てられ、一三年にグラント將軍  
が岩倉邸で能を鑑賞し、一四年に能楽社が芝に能楽堂を  
設立している。以上の能楽界の様相を見ると、明治維新  
により壊滅的な打撃を受けた能楽が、明治一〇年前後に  
徐々に復興を遂げていったことが言えるのである。

『門入扣』から梅若家に入門する素人弟子の人数を「表I」（9頁）にまとめたところ、明治一二年までは一年に数人が入門する程度だったものが、一三年に突然、三九名が増え、一四年になると一挙に五七名となる。このうち、一四年に入門した永田甚七【203】は三井銀行支配人で、彼の導きで三井八郎次郎【213】・三井武之助【214】や、第一銀行支配人の松本常蔵【229】が入門している。天覧能や能楽堂設立により能楽が一般に周知されたと相まって、三井財閥や銀行家の間で能楽を稽古する一種のブームが起ったと思われるのである。

茂木惣兵衛は横浜で最も成功した貿易商の一人で、当時、第七四国立銀行頭取をつとめていた。<sup>5</sup>惣兵衛が入門したのは自宅ではなく、一四年一月一日、東京の二番町にあった岩崎小次郎【278】宅であった。<sup>6</sup>当時、岩崎小次郎は大蔵省銀行局長であり、このようなことから両者に接点があったと思われる。銀行家が能を稽古する、その波に乗るように惣兵衛は岩崎の伝手を頼って初世実に入門したのである。おそらく初世実を横浜に招致する目論見があったのであろう。二か月後の一五年一月

一七日、初世実を自宅に招き稽古を始めるのである。<sup>8</sup>岩崎は明治一八年頃まで自宅などでの稽古・素謡会に出席しているのが、惣兵衛はそこで稽古を受けることも可能であったが、そうはしなかった。さらに興味深いことに、『日記』に惣兵衛が稽古を受ける様子は確認できず、自身のためというより、茂木家や横浜の知人らのために初世実を招致した可能性が高いのではないだろうか。つまり梅若家の横浜への出稽古は惣兵衛の意図によって始められたと思われるのである。

## （二）明治一五年の出稽古の概要

『日記』に見る横浜への出稽古の最後の記事は明治三四年五月二三日である。しかし、三二年六月六日以降は記事が間遠になっていく。この頃に横浜の素人弟子の組織が改変され、また初世実の意識も変化したため、出稽古が行われていても『日記』に記されることが少なくなっていたものと思われる。そして三四年五月二三日以降、『日記』に書かれなくなる。しかし、横浜への出稽古は継続されていたと思われる。

明治一五年一月から三二年六月まで、稽古の形態が少しずつ変化していく様子が『日記』から看取できるが、この約二〇年を通して見られる基本方針というものもある。それは明治一五年に初世実が敷いたものであると思われるので、同年の出稽古の概要を以下に紹介することにする。

### A 稽古日

江戸時代には一と六、二と七、三と八と付く日、というように五日おきに稽古などを行う習慣があり、明治以降も梅若家ではそれが守られていた。横浜の稽古日は二と七の付く日に設定されており、計算上は年間、最大七二回の稽古が可能であった。実際には正月・夏季などの期間は稽古がなく、梅若家、または素人弟子の所用が優先される場合もあった。一五年には五一回の稽古があり、これが標準的な回数と思われる。

### B 稽古場所

前述したように、稽古は茂木惣兵衛宅で行われた。

### C 入門者の顔ぶれ

第一回の稽古日である一月一七日、茂木宅には惣兵衛の甥に当たる茂木保二郎【296】のほか、箕田長二郎【297】・大谷嘉兵衛【300】・大西吉松【298】・水谷吉兵衛【299】・前嶋栄太郎【301】の六名が参集し、同日に入門している。この集団がのちに横浜養心会と名のる、その原型と思われる。以後、明治一五年に入門した横浜の素人弟子には小川善司【302】、谷田徳太郎（後の中村莊次郎）【346】、中村源太郎【347】、中村善太郎【348】がおり、計一〇名が確認できる。すなわち、一〇名程度が茂木宅に集まって、稽古を受けていたのである。

保二郎は後に惣兵衛（二代目）を名のる茂木家の後継者で、箕田・大谷は貿易商であった。横浜には商人が多くおり、開港地として輸出入を手がける貿易商と、食料小売商といった、どこの土地にでも見受けられるような商人と、大きく二つの系統に分かれる点に一つの特徴がある。貿易商であった茂木家が素人弟子の中心的役割を果たし、その稽古場に箕田・大谷といった、同じく貿易商が参加したところに横浜らしさが見出されると思われ

る。なお、水谷は銀行員であり、小川は貿易会社に勤務していたが、大西・谷田および二人の中村の職業は不明である。

## D 稽古の形態

明治一五年については、どのような曲目をどのような形で稽古していたか『日記』に記述がないので不明である。ただし、習物を稽古する場合には、その曲名や免状を発行する様子が記される原則なので、一五年当時は平物を稽古していたと思われる。

## E 梅若家にとつての横浜への出稽古

初世実は一から一回までの出稽古において、ほぼ毎回、自分の息子・親戚・弟子を順番に同道している（第八回・第九回は除く）。以下、何回目にも誰を連れていったかを示す。

第一回（一月一七日）・第一〇回（三月七日）

…梅若万三郎（実子・長男）

第二回（一月二七日）

…山本金之助（玄人弟子）

第三回（二月一日）・第一一回（三月二二日）

…五世観世鉄之丞（親戚・姪の夫）

第四回（二月七日）

…五三世梅若六郎（養子・当時の梅若家当主）

第五回（二月一七日）・第七回（三月二日）

…梅若豊作（弟）

第六回（二月二七日）

…梅若新太郎（親戚・甥）

初世実はその息子らを紹介する意味も兼ねて第一回から第一一回まで代わる代わるに様々な人物を同道したのである。第一二回以降、六郎と鉄之丞は単独で出稽古に赴くようになる。当時の梅若家の当主は六郎であり初世実の隠居の身であったのだが、横浜の出稽古に関しては（じつは梅若家全般にわたって）当主のごとく振舞っていた。例えば六郎が横浜に出稽古した際『日記』に「六郎ヲ遣ス」と記すことが多く、さらに参加者や謝

礼について記す場合もあり、初世実にとって六郎はあくまでも自分の代稽古をさせる存在で、稽古内容を報告させていたのである。それは観世宗家の分家の当主であった鉄之丞に対しても同様であった。家格といい芸歴といひ申し分ない立場であった鉄之丞でさえ、横浜の出稽古に関しては、初世実が自分の代稽古をさせる存在であったのである。鉄之丞家当主というより姪（次弟・広田知一の娘）の夫という親戚の立場を重視したのであろうか。ともかく、梅若家の人びとは初世実の采配で横浜に出向いていたのであった。

六郎や鉄之丞が初世実の代稽古を行うことができたのはなぜであろうか。明治二六年に初世実が素人弟子に発行した入門証に「今般当家人ニ差加候間能楽法則堅ク相守修行可致者也」とあり、この文面によれば、素人弟子は「当家」、つまり梅若家に入門する形を取っていた。横浜の素人弟子にこのような入門証を発行した形跡はないが、この発想が横浜の素人弟子にも適応できるのであれば、初世実でも六郎でも横浜の素人弟子に教えているのは「梅若家の芸である」、という論理が成り立つので

ある。鉄之丞についてもそういう考え方に拠っていたのであろう。初世実が養子・実子・親戚・玄人弟子といった大勢の後継者を養成していたからこそ成り立つ図式であり、それが梅若家の強みでもあった。

明治一五年に梅若家の人びとが横浜に稽古に行った回数をおげると、初世実が一八回（内、単身だったのが八回）、六郎が一八回（単身が一六回）、鉄之丞が一二回（単身が一〇回）、万三郎が二回（単身はなし）、金之助が二回（単身が一回）、豊作が二回（単身はなし）、新太郎が一回（単身はなし）である。

六郎が単身で横浜に出向く日数が圧倒的に多いことを考えると、横浜の素人弟子を将来的に六郎に任せる考えであったことが推測できる（事実、そうなっていくのである）。

一方、万三郎・豊作・新太郎は単身で出稽古させることはなかった。万三郎については、当時、まだ一五歳であり単身で素人弟子を教えることを時期尚早と初世実が判断していたと思われる。豊作・新太郎については、横浜の素人弟子を任せる気がなかったのであろう。金之助

に単身で稽古に行かせたのは第一九回（五月二日）の一回だけで、『日記』には「代ワリニ金之丞ヲ遣ス<sup>9</sup>。」と「代ワリニ」という文言をわざわざ記しており、やはり金之助に横浜の弟子を任せる気もなかったようである。梅若家の人間であれば初世実の代稽古は可能であるが、それにふさわしい人物を選択していたのである。

#### F 素謡会の開催

一二月一〇日、小川善司が自宅で素謡会を催しており、『日記』には「茂木 水谷 中山出席。実 六郎 万三郎出勤」とある。茂木は茂木保二郎、水谷は水谷吉兵衛、中山は中山讓治【226】のことと思われる。そこに初世実・六郎・万三郎が出勤したのだが、彼らがどのような働きをしたのかは不明である。素人弟子がどのような曲目を謡ったのかも不明だが、平物であったと考えると間違いないだろう。

素謡会は日頃の稽古の成果を発表する場であり、同じ稽古場に集う仲間の連帯感を高める場であったと思われる。そうでありながら、会員以外の参加も歓迎されると

いう緩やかな対応も見せていた。例えば、前述の中山讓治は神奈川県士族とはいえ横浜養心会会員ではなく、もちろん茂木宅で稽古を受けることはなかった。『日記』を見ると、このような例は他団体の素謡会などにも見受けられ、この柔軟な措置は横浜独特のものというより、当時の素人弟子の特徴と言うべきものであろう。

（第二章 明治一六年以降の横浜への出稽古」以降は次号に掲載する。）

[表 I] 『門入性年月日扣』に見る梅若家の素人弟子の入門者数

和 暦	西 暦	人 数	横 浜
弘化 03	1846	2	0
弘化 04	1847	1	0
嘉永 01	1848	1	0
嘉永 02	1849	20	0
嘉永 03	1850	5	0
嘉永 04	1851	9	0
嘉永 05	1852	31	0
嘉永 06	1853	9	0
安政 01	1854	4	0
安政 02	1855	1	0
安政 03	1856	6	0
安政 04	1857	6	0
安政 05	1858	1	0
安政 06	1859	15	0
万延 01	1860	6	0
文久 01	1861	4	0
文久 02	1862	9	0
文久 03	1863	0	0
元治 01	1864	1	0
慶応 01	1865	8	0
慶応 02	1866	3	0
慶応 03	1867	0	0
明治 01	1868	0	0
明治 02	1869	0	0
明治 03	1870	2	0
明治 04	1871	3	0
明治 05	1872	4	0
明治 06	1873	3	0
明治 07	1874	3	0
明治 08	1875	8	0
明治 09	1876	2	0
明治 10	1877	9	0
明治 11	1878	9	0

和 暦	西 暦	人 数	横 浜
明治 12	1879	6	0
明治 13	1880	39	0
明治 14	1881	57	1
明治 15	1882	54	10
明治 16	1883	31	0
明治 17	1884	44	8
明治 18	1885	24	6
明治 19	1886	9	5
明治 20	1887	22	4
明治 21	1888	10	3
明治 22	1889	14	7
明治 23	1890	6	3
明治 24	1891	17	5
明治 25	1892	19	7
明治 26	1893	31	4
明治 27	1894	14	1
明治 28	1895	36	11
明治 29	1896	38	8
明治 30	1897	36	13
明治 31	1898	45	20
明治 32	1899	69	10
明治 33	1900	32	3
明治 34	1901	13	3
明治 35	1902	21	5
明治 36	1903	8	1
明治 37	1904	6	1
明治 38	1905	0	0
明治 39	1906	20	9
明治 40	1907	15	6
明治 41	1908	19	2
時期不明		24	0
合計		964	156

## 注

- (1) 全七巻。八木書店より二〇〇二年から〇三年にかけて出版された。
- (2) 初代梅若実研究会は『門入姓名年月扣』に載る弟子に通し番号を付した。それによれば九八九名の氏名が確認できるが、そのうち二五名は重複して書かれているので、実際は九六四名の入門を記録するものと言える。
- (3) 『門入姓名年月扣』に「横浜」「横浜養心会」などの記載がある人物を数えたが、横浜住の師匠を通じて梅若家に入門した素人弟子もそのなかに含めた場合もある。
- (4) のちに『横浜近代史辞典』として復刻版が発行される(湘南堂書店、一九八六年)。本稿ではそれを参照した。
- (5) 『門入扣』の「茂木惣兵衛【283】」には「横浜 七十四銀行」とある。
- (6) 岩崎小次郎は小二郎と書かれるほうが多いが、『門入扣』に小次郎と書かれていることから、本稿ではこの表記に従った。『日記』明治一四年一月一六日に「午後三時より二番町岩崎小次郎初テ参ル。岡田寛・平岡照一・益田孝参ル。外ニ塚原周蔵・茂木惣兵衛門入。夜十二時帰宅。」とある。
- (7) 彦根正三編『改正官員録』明治一四年一月版(博公書院、一八八四年)。
- (8) 同日の『日記』に「午後三時より万三郎ヲ連横浜茂木惣兵衛宅へ罷越ス。岡田寛同道。七名入門。茂木保二郎・箕田長次郎・大谷嘉兵衛・大西吉松・水谷吉兵衛(丸三銀行)・前嶋栄太郎門入。七名より肴料七円。外二三円。車料三円出ル。夜十二時帰宅。」とある。当日、入門したのは六名であるので「七名入門」と記すのは不審だが、七名が肴料を支払ったことから、茂木惣兵衛を含む入門者を七名と勘違いしたものでらうか。
- (9) 金之丞とは金之助のこと。